

アメリカ小説の日本語訳における女性語増訳の影響要因

趙 洋

(大阪大学大学院言語文化研究科)

Abstract

It is widely said that Japanese women prefer not to use Japanese women's language. However, the speech of foreign female characters in Japanese translations is usually translated to use stereotypical Japanese women's language. Hence, this study seeks to explore the factors which may play a role in the amplification of Japanese women's language in translations of American novels. Four hypothetical factors are proposed: the personality of the female characters in the original novels (with consideration to social class as well), the time period that Japanese versions were first published, the gender of translators, and the age of translators. With data collected from the Japanese translations, these factors will be examined to determine if any (of the four factors) influence the use of stereotypical Japanese women's language.

1. はじめに

英語や中国語とは異なり、日本語においては、文末助詞から発話者の性別を判断することが可能である。日本語の文末助詞は「男性用」と「女性用」に分けられているからである。寺田(1999)は、文末表現を男性用、女性用に分類し、女性だけが使用し、男性は使用しない「絶対女性語」、男性だけが使用し、女性は使用しない「絶対男性語」、男性よりも女性が多く使用する傾向のある「相対女性語」、女性よりも男性が多く使用する傾向のある「相対男性語」の4種類に分けている。しかし、実際の言語使用の状況を観察してみると、女性用とされている「～わ」「～かしら」などの文末表現を使っている男性が増えている。一方で、従来男性専用の表現とされてきた「～ぞ」「～ぜ」といった終助詞を使用している女性も少なくない。また、「女らしさ」の特徴とされた女性語も、その使用が衰退傾向にあるという指摘が多い(小林 1993, 小川 1997, 尾崎 1999, 水本他 2006)。尾崎(1999: 70)は「現在そして以前から衰退の著しかった女性語は文末形式である。ぞんざいにならない範囲で女性もはっきりと物をいうという言語行動様式がますます支持される世の中になってきている。現在の若者の使用状況を見ると、将来この流れを食い止めるような気運が生まれな限り、こうした女性専用の文末形式はいずれ「寿命」を迎えることはほぼ間違いない」と女性用終

助詞に「寿命」が近づいていると述べている。

他方、日常生活において、日本人女性が女性語を使わなくなっているのとは対照的に、翻訳の中で登場する外国人女性は典型的な「女ことば」を多用していると指摘されている(中村 2007a, 2007b, 2013)。中村(2013)はまた、外国人女性の発言は典型的な女ことばに翻訳されることが多いのに対し、外国人男性の発言は標準語に翻訳されることが多いと指摘している。筆者は過去の研究において、*The Great Gatsby*(Fitzgerald, 1925)の英語原著と日本語訳(村上春樹(2006)『グレート・ギャツビー』、小川高義(2009)『グレート・ギャツビー』)の比較を通して、中村の主張を検証した。登場人物の発話を抽出し、代表的な女性用終助詞および男性用終助詞が増訳¹される回数を整理して統計処理を行った。その結果、女性用の文末表現の使用数は男性用のそれを圧倒的に上回り、村上春樹訳においてはほぼ3.5倍²、小川高義訳においては9倍³に達していることが明らかになった。寿命を指摘されている女性用終助詞が、日本語訳においては増訳されていたのである。

小論では、訳者がどのような効果を狙って女性用終助詞を増訳したのかということについて、さらに検討を行う。対象を6つの代表的な女性用の文末表現「わ」「わよ」「わね」「かしら」「のよ」「の(ね)」⁴に絞り、それらの終助詞が発話総数に占めている割合に基づき、女性語が意図的に増訳されることに影響をもたらす要因を多面的に考察する。

2. 研究目的

現在、日本語の会話において女性語の使用が衰退傾向にあるのに対して、英文和訳における女性の登場人物の発話では、女性語が意図的にあるいは無意識のうちに増訳されている。小論では、どのような要因が、英語には存在しない、女性用の文末表現が日本語訳の中で増訳されていることに影響を与えているのかを考察する。影響を与える要因を仮定し、対象から収集されたデータによってその仮説を検証していく。訳本において、女性用終助詞が増訳されていることにどのような要因が影響を与えているのか、ということの解明するのが小論の目的である。

3. 女性語と女性用終助詞

3.1 『女のことばの文化史』から女性語の由来の概観

女性と日本語の歴史に関する話しことばの資料はほとんど残されていない。現存する文献、資料から当時の言語使用の状況を推測したものに、遠藤(1997)がある。

遠藤は『万葉集』成立のころ(759年以後)までは、性差ははっきりした形では存在しなかった(p. 7)、「平安時代も初期の文学・記録などで性差に触れられているものはない」(p. 8)、また『枕草子』⁵と『源氏物語』(一〇〇八)でも「性による差は固定していない」(p. 11)と述べている。

性差が顕著に現れるのは、鎌倉時代(1192-1333)と室町時代(1336-1573)に入ってからのもので、宮中で働く女性たちの間で使用された「女房詞」に見られる(pp. 42-55)。しかし、女房詞は女房たちの間でのみ通じる一種の隠語であり、現代の女性語とは種類と用法の点で差異が非常に大きい。そのため、女性語の原型とはいえない。

江戸時代(1603-1868)になると、中国儒教の男尊女卑思想が日本に浸透し、男女の地位を固定的なものにした。「江戸時代の初めから、女訓書、作法書で、女性の生き方やことばづかいが、綿密に、細部にわたり、繰り返して教えこまれたその裏には、その規定の枠に入らない、教えた従わない女性やことばがあったこと」(p. 102)と述べられており、女性のことば、行動規範、そして、生き方が厳しく締めつけられた。それはまた、明治時代(1868-1912)における言語使用にも深い影響を及ぼした。

明治時代では、日本は近代国家建設の政策として、国民を統合するために「教養のある東京の日本語話者」のことばづかいを基準にして「国語」(=「標準語」)が制定された。他方、国語学者⁶によれば、国民全体を対象として制定された「国語」は、男性がその主要な話し手として想定されている。女性語は男性性の隠された「標準語」の亜種として位置づけられた(中村, 2007b: 43-46)。

明治政府はまた、男女の差異を強調した。男性と女性の役割を明確に差別化し、女性に対して「良妻賢母」として、夫を支え、また国民を生み育てる責任があると主張した。そのため、女性と男性のことばも小さいころから区別されるべきであるとされた。女性はどうのようふるまい、どのように話すべきか、ということが明確に規定された。結果として「男性の言葉づかいを『男らしさ』の視点から規範化した言説は見当たらない」が、女性のことばは「『話しすぎない、丁寧に話す、間接的に話す』といった話し方全体の印象も含まれることになったのである」(中村, 2007b: 43)と区別されてしまった。現代女性語の形はここまででほぼ確立された。

3.2 女性用終助詞

『日本語学研究事典』(2007: 533)の「女性語」の項では、女性専用の終助詞・人称詞・感嘆詞の使用と動詞の命令形不使用などは女性語の特徴だと記述されている。終助詞については「ことばの性差が最も顕著に観察される」(尾崎, 1999: 62)と研究者に広く認められている。この点を踏まえ、小論では代表的な女性用終助詞を対象とし、日本語訳における増訳の実態を分析する。小論で取り上げた代表的な女性用終助詞の『日本文法大辞典』(1971)における定義は以下の通りである。

(1)「わ」と「わ+よ/ね」

「女性が使う。やわらかな感じを与えながら、軽く主張したり、ほんとうにそうだという気持ちをそえる」(p. 924)

「わ」の最も重要な働きを挙げている。「わ」に「よ」ないし「ね」を後続させ「わよ」「わね」のような複合形が作られる、やわらかい感じで相手に同意を求めたり、強調したりすることができる、といった点についても触れられている。

(2)「の」と「のよ」

「断定表現に用いられ、その語調がやわらげられる。現代語ではもっぱら女性が用いる」(pp. 652-653)

「補説」の部分で「終助詞『よ』『ね』『さ』をさらに添えた『のよ』『のね』『のさ』の形で用いられることもある」、「現代語ではまた『のよ』『のね』は女性しか用いないし『のさ』は多く男性が用いるのであるが近世後期江戸ことばでは一般的に用いられた」(p. 653)と追加している。

(3)「かしら」

「今日では、主として女性が使う」「◎質問文を作る。◎自分に問うような気持ちで疑いや不審を表わす。◎打消の語について、自分の願いを表わす」(p. 105)

「かしら」は最も典型的な女性語の一つとして、女性語研究では頻繁に対象として扱われる。

小論で詳細に記述しているのは、『日本文法大辞典』における定義である。そのほか、『日本語百科大事典』(1995: 557-562)、『角川国語大辞典』(1982: 182, 799, 1103)、『広辞苑』(1991: 480, 2001, 2747)などの辞典でも、小論で取り上げる 6 つの終助詞は主に女性が使用している終助詞であることが広く認められている。

4. 研究対象について

4.1 研究対象の選択

小論では、英語圏だけでなく、世界中の文学愛好家から関心を集める *The Great Gatsby* と *The Age of Innocence* (Wharton, 1920) を英語原著として取り上げた。また訳文については、比較検討を行うために各小説について新しい訳本と古い訳本の両方を選択した。*The Great Gatsby* は F・スコット・フィッツジェラルドの筆になる、多くの人びとに高く評価されている代表的な米国文学の一作であり、1925 年に出版された。小説中ではまったく異なる社会階級の女性が描写されており、身分と女性語の増訳との関連についての検討が可能である。日本では、主に 8 種類の訳本が入手可能である。この点もまた、検証に適する作品であるかどうかを判断するにあたって、重要な要素であった。作品の長さや年代を考慮し、もう一点、世界的な文学作品とされている *The Age of Innocence* を比較対象として取り上げた。*The Age of Innocence* は 1920 年に出版され、翌年にピューリッツァー賞⁷を受賞した。日本語訳については 3 種類の訳本が入手可能であり、*The Great Gatsby* の訳本と同じ年代で出版されたものもある。これはまた、出版年代と言語使用の変遷との関連を分析するうえで重要な条件であった。

訳本については次の理由で選択を行った。

- ・ 訳本の流通性

2 つの英語原著には複数の日本語訳が用意されているが、そのうちすでに品切れとなっており、再版されておらず、市場に流通していないものは、小論では対象外とした。研究素材の入手自体が至難であり、また読者に対する影響力もきわめて限定的であるためである。

- ・ 時代性の差異に伴う言語使用の変化

出版時期が異なると、当時の言語使用も異なる可能性があり、その場合、読者の女性語に対する意識も異なる。したがって、同一作品であっても、時期によって訳者の女性語に対する態度が異なり、それが増訳に影響を与えると推測できる。縦断的な言語使用の変化を考慮に入れるため、

小論で扱う 2 種類の小説ともに古い訳本と新しい訳本を 1 点ずつ対象として比較する。

- ・ 訳者の背景

The Great Gatsby の最新の訳本は小川高義によるもので、2009 年に出版された。市場に流通している訳本の中では、現代の日本社会の言語使用に最も近いと考えられる。比較のための古い訳本は、小川高義と同じ標準語圏生育の大貫三郎のものを選択した。方言によって言語使用に差異が生ずるのを避けるためである。

Furukawa (2010) と古川 (2013) は、翻訳家の性別が、女性登場人物の会話文の訳に影響を与える可能性があるとして指摘している。この点を考慮し、*The Age of Innocence* では男性訳者 (伊藤整) と女性訳者 (大社淑子) によるものを 1 点ずつ選択して考察する。

研究対象の英語原著と日本語訳の情報を以下にまとめる。

表 1 研究対象に関する情報のまとめ

	<i>The Great Gatsby</i> (1925)	<i>The Age of Innocence</i> (1920)
作者	F. Scott Fitzgerald	Edith Wharton
新版訳本	『グレート・ギャツビー』	『エイジ・オブ・イノセンス-汚れなき情事』
出版時間	2009 年 (平成 21 年)	1993 年 (平成 5 年)
新版訳者	小川高義 (M)	大社淑子 (F)
旧版訳本	『華麗なるギャツビー』	『汚れなき時代』
出版時間	1957 年 (昭和 32 年)	1941 年 (昭和 16 年)
旧版訳者	大貫三郎 (M)	伊藤整 (M)

* 訳者の後の () は、訳者の性別である。F は女性 (Female)、M は男性 (Male) を指す。

表 1 からわかる通り、新しい訳本 (それぞれ 2009 年, 1993 年) と古い訳本 (1957 年, 1941 年) にはいずれも 16 年の差があるが、前者と後者は両方とも同じ時代に出版されている。また前述の通り、新しい訳本と古い訳本にはいずれも 52 年と約半世紀の隔たりがあり、これは女性語終助詞の翻訳の変遷が訳本の中でどのように反映されているのか、という問題の考察を進めるのに十分であると思われる。

4.2 研究対象とした小説の概略

2 種類の小説は、ともに同じ時代に執筆されたものであるが、人物設定と物語の展開はまったく異なる。

4.2.1 *The Great Gatsby*

以下は *The Great Gatsby* のあらすじである。

ニックという男が語り手として小説が進行する。ニックは1922年にニューヨーク郊外のロング・アイランドにあるウエスト・エッグに引っ越し、謎に包まれる男ギャッツビーの隣人になった。対面のイースト・エッグには、ニックのいとこであるデイジーが大金持ちの夫トムと一緒に暮らしている。ニックがデイジーとトムを訪ねたとき、デイジーの親友であるプロゴルファーのジョーダンと出会い、ジョーダンからトムはニューヨークに愛人がいるということ、隣人のギャッツビーが頻繁に豪華なパーティをひらくことを聞いた。

ある日、ニックがギャッツビーからパーティの招待状をもらい、出席することになった。パーティでギャッツビーと知り合いになり、そこで彼の隠された物語を知った。謎の男ギャッツビーは、デイジーの昔の恋人だったのだ。ニックの助けを借りて、ギャッツビーはデイジーと再会してすぐ不倫関係に陥った。一方、トムも自分の妻デイジーとギャッツビーの不倫の関係に気づき、ギャッツビーの本当の身分を疑うようになった。ある日、ギャッツビー、デイジー、ニック、トム、ジョーダンの5人が一緒にニューヨークに集まったとき、ギャッツビーとトムの2人はデイジーをめぐる口論した。混乱し、発狂したデイジーは、ギャッツビーの車を運転して帰宅の途に就いた。その道中、トムの愛人マートルを誤ってひき殺してしまった。トムは、ギャッツビーが運転してマートルをひき殺したとマートルの夫に伝えた。ギャッツビーは、殺人犯だと勘違いされ、マートルの夫に射殺された。

4.2.2 *The Age of Innocence*

次は、*The Age of Innocence* の概略である。

1870~80年代のニューヨークの上流社会が舞台である。

ニューヨークの名家、アーチャー家の長男ニューランドは、みなが憧れる生活をしている名家に生まれ、有名な弁護士として地位も収入もあり、そして若く美しい婚約者がいる。しかし、ある日突然エレンという名の女性がヨーロッパからやってきて、ニューランドの心を動揺した。

エレンはニューランドの婚約者メイのいとこであり、ヨーロッパで育ち、伯爵オレンスカと結婚した。しかし、エレンは夫の浮気を発見し、離婚するつもりで実家のあるニューヨークに戻り、家族の愛と新しい生活を求める。その中、小さいころエレンに憧れたニューランドは、再びエレンに恋した。ニューランドは、勇敢に自由を追求するエレンに憧れる一方で、いまの自分の婚約者であるメイにも未練がある。やがて、メイがニューランドの心境の変化に気づくようになった。彼女はいつも天真爛漫であったが、そのときは、エレンをヨーロッパへ帰し、妊娠したふりをしてニューランドを自分のそばにおき、彼の心を取り戻すことを計画した。

エレンは、ニューランドの優柔不断なさまを目にし、またメイが「妊娠」したことを信じた。家族の無理解にも落胆し、ニューヨークにいる意義を失った。家族の名誉、そしてメイとニューランドの幸福を守るため、一人ヨーロッパに戻った。

ニューランドは、「妊娠」をしたメイのそばにいてあげた。やがて実際にメイは二人の子どもを産んだが、最後は病気で亡くなった。妻が亡くなった後、ニューランドはエレンがいまずっと一人でヨーロッパで生きていることを知っていたが、再び彼女に会うことはなく、二人の思い出を心に抱きながら、一人老いていく。

5. 仮説と考察

女性語の増訳に影響を与える要因に関して、4つの仮説を設定した。本章では、4つの日本語訳からデータを収集し、仮説を検証するための割合を計算した。その結果を基に、女性用終助詞の増訳に影響を及ぼす要素の考察を行った。

5.1 登場キャラクターの社会階級

因(2005: 30-31)は、小説、漫画などにおける性差を示す表現、特に女性が使うとされる表現形式(女性語)を観察し、その使用の広がりや表現手段としての可能性を述べている。すなわち、訳者は女性語の増訳によって、読者の女性人物に対するイメージを微細なレベルで動かしているのではないかと推測することができる。起点言語(小論では英語を指す)の言語体系には、女性用終助詞という概念はないが、訳者が目標言語(小論では日本語を指す)に翻訳する際にわざと増訳するのは、女性用終助詞の特徴を利用して特定の機能を実現するためであるという理由が浮かび上がった。

女性語は従来「女らしい」「上品なことば」とされている。Inoue(2002: 406-408)は「だわ言葉」などは20世紀前半までは上品であり、育ちのいい都会の女性のものというイメージが確立されており、実際に中流階級やエリート層が会話に用いていたと述べている。すなわち、女性語の使用は女性の登場人物の階級とつながる可能性が高いと考えられる。したがって、1つ目の仮説として、女性語の増訳と階級の間に関連性があるのか、あるとすればそれはどのようなものであるか、という点について検討を行っていく。

The Age of Innocence は1870~80年代のニューヨークの上流社会が物語の背景として設定されており、主要な女性の登場人物はほぼ同じ上流階級から出身し、同じ環境で生まれ育っている。*The Age of Innocence* と異なり、*The Great Gatsby* は労働者階級、中産階級、上流階級という3つの社会階級の女性キャラクターを描いている。そのため、女性キャラクターの人物像の特徴と女性語の増訳の関連性についての考察は、*The Great Gatsby* のデイジー(上流階級)、ジョーダン(中産階級)、マートル(労働者階級)の3名の女性キャラクターの発話を対象として取り上げる。

デイジーはその時代のニューヨーク社会における典型的な上流階級の女性であり、富裕な家庭に生まれ育ち、その美貌から多くの男性に追い求められていた。地元のお金持ちと結婚し、上品な生活を送っている。他方、デイジーの親友であるジョーダンは一般的な家庭に生まれるが、自分自身の能力でプロゴルファーとなり、自由な生活を送っている。しかし、出身が重視されていた当時の社会においては、デイジーとは異なり、ジョーダンはやはり中産階級であった。マートルは、上流階級のトム(トムの愛人ではあるが、もともとガソリンスタンド兼自動車修理屋の経営者であるウィルソンの女房である。いつか退屈な生活から逃れられると期待しているが、現実にはウィルソンとの生活で妥協している。このように、マートルは上流階級に憧れる労働者階級のキャラクターとして設定されている。

3人の当時の社会階級をおさえたうえで、以下では小川訳と大貫訳から収集された女性語の増訳回数の具体的な数値を見ていく。

表 2 総発話における各女性用終助詞の増訳回数まとめ(小川訳)

	わ	わよ	わね	かしら	の	のよ	総数
デイジー	34	8	3	10	27	16	98
ジョーダン	35	4	9	9	24	20	101
マートル	10	2	0	1	7	6	26

表 3 総発話における各女性用終助詞の増訳回数まとめ(大貫訳)

	わ	わよ	わね	かしら	の	のよ	総数
デイジー	69	8	3	11	23	28	142
ジョーダン	56	3	1	3	57	23	143
マートル	12	3	2	2	12	11	42

表 2 と表 3 の数値から、女性用終助詞の増訳回数が人物によって大きく異なることがわかる。2つの訳本とも、デイジーの総数とジョーダンの総数はほぼ同じで、マートルの総数より圧倒的に多い。しかし、ほぼ全編で登場しているデイジーとジョーダンと比べると、トムの愛人であるマートルは主に第 2 章でだけ登場する。すなわち、発話数はもともと多くないため、増訳回数より発話総数に占める割合の方が正確に女性語の増訳の状況を捉えていると考えられる。表 4 と表 5 は、増訳される女性用終助詞が発話総数に占めている割合を示す。

表 4 発話総数における各女性用終助詞およびすべての女性語終助詞が占めている割合(小川訳)

	発話総数	「わ」の割合	「わよ」の割合	「わね」の割合	「かしら」の割合	「の」の割合	「のよ」の割合	女性語終助詞の割合
デイジー	244	13.93%	3.28%	1.23%	4.10%	11.07%	6.56%	40.16%
ジョーダン	224	15.63%	1.79%	4.02%	4.02%	10.71%	8.93%	45.09%
マートル	62	16.13%	3.23%	0.00%	1.61%	11.29%	9.68%	41.94%

*割合の数値はすべて小数第 3 位で四捨五入した。

表 5 発話総数における各女性用終助詞およびすべての女性語終助詞が占めている割合(大貫訳)

	発話総数	「わ」の割合	「わよ」の割合	「わね」の割合	「かしら」の割合	「の」の割合	「のよ」の割合	女性語終助詞の割合
デイジー	251	27.49%	3.19%	1.20%	4.38%	9.16%	11.16%	56.57%
ジョーダン	257	21.79%	1.17%	0.39%	1.17%	22.18%	8.95%	55.64%
マートル	70	17.14%	4.29%	2.86%	2.86%	17.14%	15.71%	60.00%

*割合の数値はすべて小数第3位で四捨五入した。

割合の方では回数と異なる結果となり、3名の女性キャラクターの間でそれほど大きな差が見られなかった。また、マートルという労働者階級の女性において最も女性用終助詞が増訳されたということが大貫訳からはっきりと示された。小川訳でも、マートルはデイジーより女性用終助詞を多く使っている。しかし、表のデータから反映されているもう1つの問題点に注意しなければならない。大貫訳の「わ」の割合の差は最大 10.35(デイジーとマートルの差)、小川訳の方では割合の差が 2.2%(デイジーとマートルの差)となっている。また、「の」の場合には、大貫訳では割合の差は最大 13.02%(デイジーとジョーダンの差)となっているのに対して、小川訳ではわずか 0.58%(ジョーダンとマートル)である。すなわち、総合的な割合から見ると、両方の訳本とも3名の女性キャラクターの間でそれほど大きな差は出てないが、同一の女性用終助詞の増訳の割合は、小川訳と比べると大貫訳の方が際立って示されている。この点について質的な分析を行い、背後にどのような要因があるのかをさらに深く検討する必要があると思われる。女性語増訳の影響要因にはならないので、小論では詳細な説明を行わない。

以上のデータから、英語小説の日本語訳において「上流階級の女性が女性語を使う」「労働者階級の女性はまだ上品な女性語を使わない」という考えは当てはまらないといえる。

5.2 出版年代と言語使用の変化

前述の通り、日本語会話においては女性語の使用が衰退傾向を示しているという報告は多い。すなわち、昔の日本社会と比べると、現代社会のほうが女性語の使用が少ないはずである。翻訳においても同様の変化が生じているのだろうか。この節では、52年の隔りがある古い訳本と新しい訳本を用いて、50年前と50年後で女性語の使用にどのような変化があるか、量的な面から考察していく。(以下の表のデータは主要な女性人物の発話から収集した)

表 6 *The Great Gatsby* の訳本における女性語の割合の比較

	デイジーの割合	ジョーダンの割合	マートルの割合	平均的な割合
小川訳(2009)	40.16%	45.09%	41.94%	42.45%
大貫訳(1957)	56.57%	55.64%	60.00%	56.57%

*割合の数値はすべて小数第3位で四捨五入した。

表 7 *The Age of Innocence* の訳本における女性語の割合の比較

	エレンの割合	メイの割合	平均的な割合
大社訳(1995)	41.31%	48.44%	44.30%
伊藤訳(1941)	46.57%	50.94%	48.06%

*割合の数値はすべて小数第3位で四捨五入した。

表 8 年代の区別と女性語の割合の比較

	新しい訳本(平成時代)		古い訳本(昭和時代)	
バージョン	小川訳	大社訳	大貫訳	伊藤訳
平均的な割合 (訳本別)	42.45%	44.30%	56.57%	48.06%
平均的な割合 (時代別)	43.59%		52.17%	

*割合の数値はすべて小数第3位で四捨五入した。

表 6-8 の数値は、翻訳の時期が進むにつれて、日本語訳において女性用終助詞が発話総数に占めている割合がどのように変化していくかを表したものである。3 つの表のデータを総合的に分析すると、現代に出版された訳本の女性用終助詞の割合は、より古い時代に出版された訳本の割合より比較的に低いことがわかる。すなわち、女性語の使用が衰退傾向にあるという現象は翻訳においてもある程度当てはまる。

水本他(2006)は、ドラマと実際の会話において、女性用終助詞の使用を比較して有意義なデータを提供している。ドラマにおける女性キャラクターと実際の日常会話における発話者の両者とも、小論で検討する女性キャラクターと同様、20代・30代の女性である。調査対象を女性が多用する5つの女性用終助詞「わ系(わ、わね、わよ(わよね))」、「かしら」、「ね」、「よ(よね)」、「のよ」に絞り、使用頻度を算出した。結果としては、実際の会話において女性用終助詞の使用頻度は極端に低く、5つの終助詞の平均的な使用頻度は1.22%となっている。ドラマにおいては、女性用終助詞の平均的な使用頻度が9.10%となっており、実際の会話より高い数値を示しているが、

小論で収集したデータと際立つ差があることは無視できない。中でも、大貫訳において女性用終助詞が増訳された平均的な割合は半数を超え、56.57%までに達し、また最も低い割合でも42.45%となった。すなわち、4つの訳本において女性用終助詞の増訳割合は、実際の会話とドラマにおいて女性用終助詞の使用頻度をはるかに上回っている。この点は留意されるべきである。中村が指摘した通り、訳本の登場人物である外国人女性の方が典型的な女ことばを使用しているという主張が実証された。

5.3 訳者の性別と女性語の増訳の関係

女性語が訳本で大量に増訳されているのは、訳者自身の言語使用と何か関係があるのか、という疑問がある。特に訳者が女性だとすると、無意識のうちに女性語を増訳する可能性があり、逆に意識的に女性語の使用を避けている可能性もある。よって、大社淑子および伊藤整による同一の作品の翻訳と、同じ平成時代に出版された小川高義の翻訳との比較を試みる。訳者の性別が訳本の女性登場人物の言語使用にどのような影響を及ぼすのかについて分析を行う。

まず、大社淑子と伊藤整による同一の作品の翻訳を比較すると(表7)、大社の割合は44.30%で、伊藤訳の48.06%より低かった。

次に、表8からわかるように、大社訳では女性用終助詞が若干多く使用され、小川訳との差は2%に満たない程度であった。

つまり、女性訳者である大社が男性訳者より女性語を多く使うという考えは、小論のデータから実証できない。

他方、古川(2015)は男性訳者の方が女性登場人物の話し方を女らしく訳してしまうという考えを指摘した。古川は、文末詞に対する5段階の分類 –strongly feminine, moderately feminine, neutral, strongly masculine, moderately masculine– (Okamoto and Sato, 1992: 480-482) に従い、*Emma*、*Pride and Prejudice* などの古典作品の日本語訳計8点を定量分析した。その結果、男性訳者の方が女性訳者より *feminine forms* を使う確率が高いことが示された。その結果から古川は、男性訳者が「女はこう話すべき」というステレオタイプに縛られやすく、ゆえに男性訳者の訳本に登場する女性人物の女らしさが強調されがちであると結論づけた。表7のデータから見ると、同じ *The Age of Innocence* の訳本として、女性訳者に翻訳されたものより男性訳者によるものの方が、少し高い確率を示している。しかし、上掲の表8を見てみると、同じ平成時代に出版された2つの訳本の訳者として、女性訳者の大社と比べると、男性訳者の小川は、比較的に低い確率を示しているとわかった。したがって、ただ性別だけではなく、ほかの要因にも左右されると思われる。

5.4 訳者の年齢と女性語の翻訳の関係

この節では、同じ男性訳者でも、翻訳した時点の年齢によって女性語の増訳に何か変化があるかということを扱う。

遠藤(1997: 176-178)は、1995年に文化庁で行われた「国語に関する世論調査」の結果から「言葉の性差に関する意識は、世代差がきわめて大きいことがわかる。高年齢者ほど、しかも男性ほど

性差があるほうが良いと考え、若い世代ほど性差はない方が良い、また差がなくなるのは自然の流れ、と考えているのである」と述べた。すなわち、同じ男性訳者であっても、年齢が高いほど女性語を用いる傾向が強くなるということである。以下で、小論のデータを利用してこの主張を考察する。

表 9 男性訳者の年齢と女性語の増訳の割合

訳者	訳本出版年	生年月	翻訳した時点の年齢	女性語終助詞の占めている割合
小川高義	2009	1956年2月	53歳	42.45%
大貫三郎	1957	1916年9月	41歳	56.57%
伊藤整	1941	1905年1月	36歳	48.06%

表 9 から、翻訳時の年齢という点からは、小川が一番高く、次に大貫、伊藤となる。翻訳時の年齢が一番高い小川が、逆に女性語終助詞の使用率が最も少ないということがわかった。しかし、小川は大貫と伊藤と異なる年代に属するという前提があるので、生まれた時代の社会背景と当時の言語使用の差異も重要な要因であると思われる。

他方、大貫と伊藤はほぼ同じ社会背景に属し、当時の言語使用にも大きなギャップがない。翻訳時の年齢が高い大貫の方は、確かに伊藤より多くの女性用終助詞を使っている。したがって、男性の年齢が高いほど女性語を使用するのは多くなるというのは、同じ時代に属する男性という条件をさらに付けた方がより厳密であると考えられる。

6. まとめ

小論では、2つの英語小説と4つの日本語訳を研究対象として、主要な女性人物の発話を抽出し、増訳された女性用終助詞が発話総数を占めている割合を計算することで、英文和訳における女性語が増訳される影響要因を考察してきた。筆者は、女性語の増訳に影響を与えるかもしれない仮説を4つ設定し、女性の登場人物ごとに女性語終助詞のデータを整理して検討を行った。比較して分析した結果は以下のようにまとめられる。

登場する女性キャラクターの階級といった人物背景と訳者の性別という2つ要素は、女性語の増訳と必ずしも関係があるとは限らなかった。他方、多く文献で指摘されてきた、日本語会話において女性語の使用が衰退する傾向にある主張は、日本語訳にも共通していた。古い訳本と新しい訳本の比較を通して、典型的な女性語が大量に増訳されるという現象は現在においてもまだ確認されるものの、確かに減少傾向にあるということが確認された。また、女性訳者と男性訳者でどちらの方がより多く女性語を増訳するのか、という点については、小論ではまだ結論づけることが難しく、さらなる分析が必要であると考えられる。同じ男性訳者であっても、年齢だけでなく、生まれた時代の社会背景と当時の言語使用状況も、女性語の増訳に影響を与える可能性があると思われ。

すなわち、女性語の増訳の背景には、単一の要因ではなく、複数の要因が同時にかつ複雑に

影響し合った結果である、ということである。

7. 今後の課題

今後は、主に次の2つの角度からさらに研究を進めたい。

まずは、小論で記述しなかった他の影響要因を分析することである。小論で言及されていない他の要因について、これから、データを増量して先行研究を広く調べて考察を行っていく予定である。

また、日本語会話における言語使用でも、日本語訳の場合でも、どのような影響によって女性語が衰退傾向にあるのか、という問題についても今後解明していく。

【著者紹介】

趙洋(チョウ ヨウ/ZHAO YANG) 大阪大学言語文化研究科博士後期課程在学中。現在、ジェンダー研究と翻訳理論の視点から、英文和訳における女性語の増訳を中心に研究を重ねている。

【註】

1. 「増訳」という翻訳方法には決定的な定義がないが、筆者は「増訳」を修士学位論文の研究テーマとして「明示化」という翻訳方法と区別して分析した。簡潔に説明すれば、字面通りの意味で「何かを増加して訳する」となる。ただし、まだ翻訳分野では定着した専門用語とは言い難い。
2. 以下は、村上春樹の訳本『グレート・ギャツビー』の主要な登場人物の発話から集計された男性用終助詞と女性用終助詞のデータである。

表 10 男性用終助詞の翻訳回数

男性	ギャツビー	トム	ニック	他人	合計
ぜ	0	10	1	2	13
ぞ	0	2	0	0	2
かい	0	6	6	2	14
だい	1	1	1	0	3
さ	1	4	3	2	10
合計	2	23	11	6	42

表 11 女性用終助詞の翻訳回数

女性	デイジー	ジョーダン	マートル	他人	合計
わ	21	11	4	4	40
かしら	9	3	0	2	14
の(ね)	17	13	5	7	42
のよ(ね/お)	11	5	4	10	30
わよ(お)	6	2	2	3	13
わね(え)	4	1	1	3	9
合計	68	35	16	29	148

3. 以下は、小川高義の訳本『グレート・ギャツビー』における主要な登場人物の発話から集計された、男性用終助詞と女性用終助詞のデータである。

表 12 男性用終助詞の翻訳回数

男性	ギャツビー	トム	ニック	他人	合計
ぜ	0	1	0	2	3
ぞ	0	12	0	3	15
かい	0	0	0	0	0
だい	0	0	0	0	0
さ	0	8	1	3	12
合計	0	21	1	8	30

表 13 女性用終助詞の翻訳回数

女性	デイジー	ジョーダン	マートル	他人	合計
わ	34	35	10	16	95
かしら	10	9	1	4	24
の(ね)	27	24	7	13	71
のよ(ね/お)	16	20	6	11	53
わよ(お)	8	4	2	3	17
わね(え)	3	9	0	3	15
合計	98	101	26	50	275

4. 小論は、『日本語学研究事典』により女性専用とされた「かしら」「だわ」「の(よ)」のような文末用語を増訳されている女性用終助詞を中心として分析する。
5. 『枕草子』が完成した詳細な時期は判明していないが、平安時代中期に完成したとされている。

6. 中村(2007b: 44)は岡野久胤(1902)と大槻文彦(1905)の叙述を引用している。
7. ピューリッツァー賞=Pulitzer Prize 新聞や文学に与えられる米国で最も権威ある賞。

【参考文献】

Fitzgerald, F. S. (1925). *The Great Gatsby*. London, Penguin Books. (大貫三郎訳『華麗なるギャツビー』角川文庫 1957. 村上春樹訳『グレート・ギャツビー』中央公論新社 2006. 小川高義訳『グレート・ギャツビー』光文社古典新訳文庫 2009.)

Furukawa, H. (2010). Rendering Female Speech as a Male or Female Translator: Constructed Femininity in the Japanese Translations of *Pride and Prejudice* and *Bridget Jones's Diary*. In Rebecca Parker, et al. (Eds.), *Translation: Theory and Practice in Dialogue*, pp. 181-198, London: Continuum.

Inoue, M. (2002). Gender, Language, and Modernity: Toward an Effective History of 'Japanese Women's Language'. *American Ethnologist* 29(2), pp. 392-422.

Okamoto, S. & Sato, S. (1992). Less Feminine Speech among Young Japanese Females. In K. Hall et al. (Eds.), *Locating Power* (1), pp. 478-488, Berkeley and Calif: Berkeley Women and Language Group.

Wharton, E. (1920). *The Age of Innocence*. New York: Random House. (=伊藤整『汚れなき時代』現代アメリカ小説全集(8)、三笠書房 1941. 大社淑子『エイジ・オブ・イノセンス-汚れなき情事』新潮社 1993.)

遠藤織枝(1997)『女のことばの文化史』学陽書房

小川早百合(1997)「現代の若者会話における文末表現の男女差」『日本語教育論集-小出詞子先生退職記念-』凡人社 pp. 205-220.

尾崎義光(1997)「女性専用の文末形式のいま」『女性のことば・職場編』ひつじ書房 pp. 33-58.

尾崎喜光(1999)「女性語の寿命」『日本語学 特集:ことばの寿命』18(9)、明治書院 pp. 60-71.

川上恭子(2006)「小説に見られる女性語の文末表現-『雪国』の駒子の会話文から-」『そのだ語文』5、園田学園日本語日本文学懇話会 pp. 25-38.

小林美恵子(1993)「世代と女性語-若い世代のことばの「中性化」について-」『日本語学』臨時増刊号 12-6、明治書院 pp. 181-192.

因京子(2005)「女性語のゆくえ: 絆として鎧としての女性語の可能性」『言語文化叢書』15、九州大学大学院言語文化研究院 pp. 30-45.

寺田智美(1999)「明治末期の女性語について-夏目漱石の小説にみえる「絶対女性語」の考察-」『日本語研究教育センター紀要』13、早稲田大学 pp. 169-187.

中村桃子(2007a)『「女ことば」はつくられる』ひつじ書房

中村桃子(2007b)『「性」と日本語: ことばがつくる女と男』日本放送出版協会

中村桃子(2013)『翻訳がつくる日本語-ヒロインは「女ことば」を話し続ける』白澤社

古川弘子(2013)「女ことばと翻訳—理想の女らしさへの文化内翻訳—」『通訳翻訳研究』13、日本通訳翻訳学会 pp. 1-13.

古川弘子(2015)「男性・女性翻訳者が女の言葉を訳すとき」『東北学院大学論集 英語英文学』99 東北学院大学学術研究会 pp. 65-74.

水本光美・福盛寿賀子・福田あゆみ・高田恭子(2006)「ドラマに見る女ことば「女性文末詞」—実際の会話と比較して—」『北九州市立大学国際論集』4、北九州市立大学国際教育交流センター pp. 51-70.

【参考辞典】

新村出(編)『広辞苑』第四版、岩波書店、1991

金田一春彦・林大・柴田武(編)『日本語百科大事典』、1995

時枝誠記・吉田精一(編)『角川国語大辞典』、角川書店、1982

飛田良文 [ほか] (編)『日本語学研究事典』、明治書院、2007

佐藤武義・前田富祺(編集代表); 工藤真由美 [ほか](編)『日本語大事典』、朝倉書店、2014

松村明編『日本文法大辞典』明治書院、1971